様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 6 月 24 日現在

機関番号：32405
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2008～2010
課題番号：20720042
研究課題名（和文）　一九二〇、三〇年代日本の西洋音楽のレパートリー形成とメディアに関する実証研究
研究課題名（英文）　Empirical research on the formation of a Western music repertoire and the media in Japan between the 1920’s and 1930’s

研究代表者
井上　登喜子（INOUE TOKIKO）
東邦音楽大学・音楽学部・准教授
研究者番号：90361815

研究成果の概要（和文）：
昭和戦前期までの日本において、西洋音楽がどのように演奏され、定着していったのかという受容過程を解明するため、西洋音楽の一ジャンルであるオーケストラ音楽のレパートリー形成の要因を実証的手法により検証した。東京及び地方都市に設立された複数の学生オーケストラの演奏会レパートリーをサンプルとして分析した結果、1920 年代から 1930 年代にかけて、古典派音楽を核とするレパートリーの標準化が進むこと、演奏会での曲目選択は音楽雑誌や国産レコード等のメディアと強い影響関係を持つことが検証された。

研究成果の概要（英文）：
This research aimed at understanding the adoption process of classical music in Japan by empirically analyzing its repertoire development through concerts performed during the early 20th century. The results indicate that so-called “Western musical canon” became the core repertoire to drive standardization, and the repertoire development was closely related to media such as music magazines and records.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	500,000	150,000	650,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：音楽学
科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般
キーワード：洋楽受容、レパートリー研究、メディア、学生オーケストラ、実証的音楽学

１．研究開始当初の背景

洋楽受容研究は、従来ケース・スタディが中心であり、西洋音楽導入の窓口となった専門機関や著名な音楽家に関する歴史的、文献学的研究の成果が蓄積されてきた。しかし、特定の団体や個人をクローズアップするこうした視点からは、「一般の人々の間にどのように西洋音楽が定着していったのか」という集団全体の受容の構造的側面は間接的な検討にとどまり、十分に研究されてきたとは

言えない。そこで、本研究は、昭和戦前期の日本のアマチュアによる西洋音楽受容を解明することを目指し、西洋音楽の一ジャンルであるオーケストラ音楽のレパートリー形成の要因を実証的手法により検証することとした。本研究の開始当初、すでに分析対象となる演奏団体の選定と演奏会データの収集を終えて、データベース作成の準備段階にあり、演奏レパートリーの全体傾向の定量的把握と基礎的分析に着手していた。

２．研究の目的

本研究は、1920 年代、1930 年代の日本における西洋音楽のレパートリー形成とメディアの関係を明らかにすることを目的とした。具体的には、東京及び地方都市に設立された複数の学生オーケストラの演奏会とそこで演奏された曲目のデータに基づき、(1) 当該期間のアマチュア音楽活動におけるレパートリーの全体的傾向とその時代的推移を定量的に把握すること、(2) こうしたレパートリー形成の変動の要因について実証分析によって明らかにすることを目指した。

ここでいう実証分析とは、統計手法による分析を指す。本研究では、統計的推測の手法の一つである回帰分析（ロジスティック回帰分析）を用いて、当該期間における学生オーケストラの演奏会での曲目選択が、先行する他団体の演奏状況やメディア等の外部要因の影響を受けていたとの仮説検定を行った。

３．研究の方法

（１）サンプル

分析のサンプルは、明治後期から大正期にかけて東京及び地方都市に設立された学生オーケストラの、1941［昭和 16］年までの演奏会とそこで演奏された管弦楽レパートリーとした。高等教育機関（旧帝国大学及び私立大学）で設立された学生オーケストラの演奏会をサンプルとした理由は、①地理的に日本全国をカバーし、②当時の西洋音楽愛好家の中核をなす若者インテリ層から構成され、③一定の演奏技術ならびに音楽教養を備えた団体であると判断したためである。全国の学生オーケストラを対象に、団体の記念誌・年史等が刊行され、設立以来の継続的な演奏会記録が相当程度の正確性をもってまとめられているという基準のもとで資料調査した結果、最終的に 9 団体に絞りこんだ。

収集したデータに基づき、2 種類のデータベースを作成した。ひとつは、1 演奏曲目を 1 サンプルとする「演奏曲目データベース」である（サンプル数 3,574。うち管弦楽レパートリー・サンプル数 1,560)。本データベースには演奏団体、演奏年月日、演奏機会、演奏場所、演奏曲目、演奏者･指揮者等の基礎情報が含まれており、レパートリーの全体傾向を定量的に把握する際に用いた。もうひとつは、1 演奏会を 1 サンプルとして構成した「演奏会データベース」(公開演奏会 405 回）である。主として、演奏会における曲目選択要因の検証に用いた。上述の管弦楽レパートリー・サンプルのうち、複数の学生オーケストラにより演奏され、且つ演奏頻度の高い曲目の上位 10 曲を抽出し、曲目選択の要因分析に用いた。その 10 曲とは、(上位より）ビゼー「カルメン（組曲)」、シューベルト「未完成交響曲」、ベートーヴェン「交響曲第 5 番」、ビゼー「アルルの女（組曲)」、ベートーヴェン「エグモント序曲」、ブラームス「ハンガリー舞曲」、ベートーヴェン「交響曲第 1 番」、ベートーヴェン「交響曲第 8 番」、ワーグナー「タンホイザー」、ベートーヴェン「交響曲第 6 番」である。

405 回の演奏会のうち、これら 10 曲の演奏回数合計は 257 回を数え(1 曲平均 25.7 回)、管弦楽レパートリー全体（1,560（のべ数)）の 16.5%を占める。また、演奏会 1 回あたり平均 0.6 曲（0.635)、つまり 405 回の演奏会のうち 2 回に 1 回は上位 10 曲のいずれかの曲目が取り上げられた計算となる。なお、11 位から 17 位までの 7 曲の演奏回数合計は 52 回（1 曲平均 7.4 回)、18 位以下（演奏回数合計 1,251 回）は 1 曲当たりの演奏回数が非常に少なく（最大値 3 回であるが大多数は 1 曲 2 回以下)、曲目選択の要因分析として適さないため、上位 10 曲を分析対象曲目とすることは妥当な手続きである。以上のように、当時の学生オーケストラには人気曲目を集中的に取り上げるという演奏傾向があった一方で、演奏されたレパートリー（のべ数）の約 8 割は、9 団体を合計しても戦前に 1～3 回しか演奏されない点で定着しないレパートリーだったことが分かる。

（２）分析方法

①分析手法

分析には統計的推測でよく用いられる手法のひとつである回帰分析を用いる。本研究は、演奏会で特定の曲目の演奏が行われるか否かという二値の選択に関する要因を測定するものである。従って、被説明変数（従属変数ともいう）は「演奏した」場合に 1、「演奏しない」場合に 0 の二値をとる質的変数(ダミー変数）となる。質的なデータを示す二値変数を被説明変数とする分析に適しているロジスティック回帰分析を用いた。本分析で検証する仮説は「曲目選択の外部要因仮説」（後述）である。

②変数

説明変数（独立変数ともいう）には、学生

オーケストラの曲目選択に影響を与えた要因として「他団体」と「メディア」という 2 種類の外部要因を取り上げる。

「他団体」変数として用いるのは東京音楽学校と新交響楽団の 2 団体である。東京音楽学校（音楽取調掛を母体として 1887 年に設立、東京芸術大学音楽学部の前身）は音楽専門家教育を目的として設置された官立の音楽学校、新交響楽団（日本交響楽協会を母体として 1926 年に設立、NHK 交響楽団の前身）は日本放送協会の資金援助を背景に設立された日本初の常設の職業オーケストラである。両者は音楽学校とプロ・オーケストラという性格の違いはあるものの、いずれも東京を本拠地とし、洋楽演奏における指導的役割を担ったという点で共通しており、学生オーケストラにとってベンチマーク（指標）として機能していたことが予想される。

「メディア」については、新聞雑誌が中心であった「紙メディア」の時代からラジオ放送（1925）や国産レコード（1927）等の新しいメディアが登場する、大正から昭和初期にかけての情報伝達の変化を考慮する必要がある。1920 年代から 1930 年代にかけてのメディアの発展は、全国の演奏会での曲目選択にも影響を及ぼしたことが予想される。本分析では「紙メディア」の代理変数として音楽雑誌を、「新しいメディア」の代理変数として国産の洋楽レコードを用いた。

音楽雑誌に関しては、個別曲目ではなく作曲家に関連する記事件数を資料調査より抽出し、変数として用いた。その理由としては、1924 年頃までの音楽雑誌では個別曲目をクローズアップした記事よりもむしろ作曲家をめぐる評伝あるいは逸話風の内容の記事が多くを占めるという当時の雑誌記事の特徴を踏まえた結果である。こうしたメディアでの作曲家の取り上げが、その作曲家による作品への読者の関心を強め、演奏曲目の選択に影響を与えたことが予想される。

国産レコードに関しては、一作品につき一年に発売された国産レコード盤の種類（これを「発売種類数」と名づける）に注目した。その理由としては、より一般的な指標である「販売数」に関する当時の網羅的かつ適正なデータは入手困難であったこと、むしろ「発売種類数」は特定の作品に対する各時代の「評判」または「流行」を表わす代理変数と捉えられることが挙げられる。なお、ラジオに関しては当該分析期間を通じて変数化するのに適正なデータを入手することができなかったため今回は採用していない。

これら 4 種類の説明変数(「東京音楽学校」、「新交響楽団」、「音楽雑誌」、「国産レコード」) のデータの作成は、次の資料に基づく。「東京音楽学校」と「新交響楽団」については、すでに刊行されている『東京藝術大学百年史』と『フィルハーモニー［19］99/2000 Special Issue』の演奏活動記録を用いて、1941 年までの演奏会情報をデータベース化した上で、説明変数として使用した。

音楽雑誌については、1901（明治 34）年から 1941（昭和 16）年の間に国内で発行された代表的な音楽雑誌を中心に記事調査を行った。『音楽之友』、『音楽』、『音楽新報』、『音楽界』、『音楽世界』、『月刊楽譜』、『音楽』（東京音楽学校学友会）の各誌を対象とし、関連記事の抽出を行った。

国産レコードについては、歌崎和彦編『証言・日本洋楽レコード史（戦前編）』（東京：音楽之友社、1998）の記録をデータ化した上で、説明変数として使用した。

③タイムラグの設定

上述のように、本分析では、学生オーケストラの演奏に先行して生じている「他団体」での演奏や、「音楽雑誌」や「レコード」での紹介を説明変数として用いた。つまり、学生オーケストラの演奏会直前の一定期間内に、東京音楽学校や新交響楽団はレパートリー上位 10 曲（の各曲目）を何回演奏しているか、代表的な音楽雑誌に関連記事は何件掲載されたか、何種類の国産レコードが発売されたかという履歴を示す量的データを説明変数とした。ここでは学生オーケストラの演奏に先行する 3 年間をタイムラグ（二つの関連した事象の間の「時間的ずれ」）として設定している。

一般に、回帰分析では被説明変数と説明変数の関連については明らかにできるが、どちらが原因でどちらが結果かという因果関係までは判断できない。その際、時間の前後関係こそが、相関がある場合にどちらが原因でどちらが結果かを判断する重要な決め手となる。つまり、説明変数にタイムラグを設定することにより、学生オーケストラの曲目選択と外部要因の間の因果関係を特定するのである。

④仮説

本分析で検定する仮説「曲目選択の外部要因仮説」をまとめると以下のようになる。

H_1（仮説）：

学生オーケストラの曲目選択は、(1)東京音楽学校、(2)新交響楽団、(3)紙メディア（音楽雑誌）、(4)国産レコードから影響を受けていた。

H_2（対立仮説）：

学生オーケストラの曲目選択は上記(1)から(4)のそれぞれの影響を受けていない。

回帰分析では上記(1)から(4)それぞれに関する変数の係数が有意となる場合、対立仮説(H_2)が棄却され、仮説(H_1)が採択されることになる。

４．研究成果

（１）個別曲目に関する分析結果

大正から昭和初期にかけて、全国の学生オーケストラの演奏会でくり返し取り上げられたレパートリー（上述の上位 10 曲）をサンプルとして、まず個別曲レベルで、これらの曲目を演奏会で「演奏する／しない」という選択にどのような外部要因が働いていたかを検証した。その結果、10 曲中 3 曲（「エグモント序曲」、「交響曲第 8 番」、「未完成交響曲」。有意水準 10%までの結果を含めるとさらに「交響曲第 1 番」と「アルルの女」が加わって 10 曲中 5 曲）に「国産レコード」の強い影響が見られた。勿論、個々の作品によって曲目選択要因は様々であり、ある作品が初演されてから定着するまでの「レパートリー形成」の歴史には作品固有の背景があるものの、この新しいメディアは学生オーケストラの曲目選択に強く働きかけるものであったことが分かる。

（２）全体傾向に関する分析結果

次に、レパートリー上位 10 曲をまとめて捉えた全体傾向に関する分析を行った結果、学生オーケストラの曲目選択が音楽雑誌や国産レコードというメディアと強い影響関係をもつことが検証された。とりわけ、1926 年以前は音楽雑誌の強い影響が確認されるが、1927 年以降は雑誌の影響は弱まり、国産レコードとの関連が強まったことを示している。一方、(曲によって関連を持つケースもあるものの）全体としてみると、学生オーケストラの曲目選択にとって東京音楽学校や新交響楽団といった他団体は直接的な影響を与える要因になっていなかったことが判明した。

（３）総括と今後の展望

以上に示したように、学生オーケストラの演奏会における曲目選択が、個別曲レベルではレパートリー形成の様々な背景を持ちつつ、全体としてみると、音楽雑誌やレコードといったメディアとの強い関連を持っていたこと、その影響は 1926/1927 年を境に音楽雑誌から国産レコードへと移行したことが明らかになった。こうした結果は、新聞雑誌に代表される「紙メディア」中心の時代からラジオ放送（1925 年開始）や国産レコードの発売（1927 年）等の新しいメディアが登場する、大正から昭和初期にかけての情報伝達の変化の影響を明確に示している。本研究は昭和戦前期におけるアマチュア･オーケストラのレパートリー形成へのメディアの影響を、データと仮説検定をもって初めて示した研究と言える。

本分析で用いた説明変数「国産レコードの発売種類数」を作品や作曲家に対する世間の関心や評判、いわば当時の「流行」のアウトプットと捉えれば、国産レコードが昭和初期の学生オーケストラの曲目選択に強い関連を持ったという実証結果は、全国のアマチュア西洋音楽愛好家がこうした新しいメディアによって伝達される「流行」にいかに敏感に反応していたかを示すものとも解釈できる。

本研究では、先行する他団体の演奏状況とメディアの影響を曲目選択の外部要因として分析したが、音楽受容の問題には、その外にも演奏技術、楽器や楽譜の所持状況、演奏者や指揮者の演奏経験、時代、地理的位置、社会的変化に至る様々な要因が複雑に絡み合っていると考えられる。今後は、これらの外的・内的要因のデータ収集とその変数化について検討し、西洋音楽の受容過程の解明に向けてさらに研究を進めたい。

また、諸メディアが音楽受容に大きな影響を与えた 1920 年代、1930 年代に引き続き注目するとともに、戦後の時代へも視野を拡げて、メディアにより創出・伝達される情報と受容層の音楽趣味の形成に関する実証的研究を行っていきたい。

最後に、本研究で示した統計的推測や仮説検定という実証的手法は、集団全体の音楽受容の傾向やその構造的側面を解明する一手法として音楽学研究においても一定の有効性をもつと考えられる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

① 井上登喜子「戦前日本における学生オーケストラの曲目選択に関する実証研究」『音楽学』(査読有)、第 55 巻 2 号、53-67 頁、2010 年

② 井上登喜子 「洋楽レパートリーの形成要因の実証分析 : 1900 年代前半の日本について」『民族藝術』(査読有)、第 24 号、159-165 頁、2008 年

〔学会発表〕（計 1 件）

① 井上登喜子 「戦前日本におけるオーケストラの曲目選択」日本音楽学会第 59 回全国大会、国立音楽大学、2008 年 10 月 25 日

６．研究組織

(1)研究代表者
井上　登喜子（INOUE TOKIKO）
東邦音楽大学・音楽学部・准教授
研究者番号：90361815

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし